

でんでん通信 第百四十三号 平成二十九年十一月

坐禅会

今月は、十一月二十九日(水)午前十時より坐禅会を行います。

みなさんのご参加をお待ちしております。

秋の永代供養会

十一月三十日(木)午後二時より

法話 一宮市、耕雲院住職 服部雅昭師

みなさんのご参詣、お待ちしております。

ブータン農業の父

以前、ブータン国王が来日された時にブータンについて掲載したことがあります。再度ブータン国について記させていただきます。

この国は国民の人口の約七十五%が仏教徒とされています。その多くがチベット仏教徒です。農家の人はほとんど仏具などに費やすそうです。立派な仏間は、日本のように普段家族が祈る場というわけではなく、法要などの時にお坊さんと呼んだ時のみに使われるらしいです。普段使われない部屋に一番お金がかかっています。「特に信じる宗教はありません」と答える人が多い日本では信じられない事かもしれません。しかし逆に彼らからみると、信じる宗教も無く生きていく方が信じられないでしょう。

この国の大きさは九州ほど、人口は七十万弱。

「世界で一番幸せな国」ともいわれます。

かつて、ブータンと日本の「かけ橋」となった人物がいました。「西岡京治(にしおか けいじ)」さん。(一九三三年—一九九二年)「ブータン農業の父」として、ブータンの人々に最も尊敬される日本人です。

一九六四年、海外技術協力事業団から農業指導のために、ブータンに渡りました。赴任当初はインド人が大半を占める農業局から冷遇を受け、試験農場すらまともに用意されなかったといいます。彼らを納得させるには、実際に試験栽培で見せるしかない。そこで彼の最初の仕事は、政府に働きかけて試験農場の土地を提供してもらうことでありました。政府が提供した最初の試験農場は、二〇〇m程の小さなもの、とにかくここから始めるしかない。そして3人の少年実習生を付けてくれたそうです。のちにこの少年たちが、ブータン農業を担う人材に成長していきました。

西岡氏が、まず植えたのは「大根」。種は日本から持ち込みました。畑の耕し、種のまき方、土のかけ方、一つ一つを丁寧に少年たちに実演して見せてあげた。大根は夜と昼の寒暖の差が大きい程、よく育つ。日本から持っていった種は、ブータンの人々が見たこともないほど、大きく立派に育ち、はじめは半信半疑であった人々も、見事な野菜の数々を大絶賛。

喜んだ国王は、西岡氏に滞在の延長を請いました。西岡氏は二つ返事で承諾。西岡氏の任期は、当初二年間であったのが、ついには二十八年間の長きに及ぶこととなったのです。

次に取り組んだのは、稲作。

ブータンでは、苗をバラバラに植えるのが普通でしたが、西岡氏は日本の田んぼのように、キレイに行列、並べて植えて見せました。列で植えると、手押しの除草機が入りやすく、風通しも良い。収量は見事四〇%アップ。次々と水田を広げてゆき、彼の開発したジェムガン県の水田は、かつての五十倍の面積に拡大しました。現在のブータンでは、西岡氏の伝えた日本風の田植えが主流となっています。

西岡氏の信念は、「身の丈にあった開発」。粘り強く、忍耐強く、地元住民の意見を尊重しながら進めていく。村人との交渉、話し合いが八百回に及んだ例まであったそうです。無駄な費用をかけることも良しとせず、「最小の費用で、最大の効果」が彼の志すところでありました。西岡氏の無私な尽力と、ブータンの人々の努力によって、ブータンの農業は飛躍的に生産性を上げました。ブータン国王は、西岡氏の功績を讃え、ブータンにおける民間人の最高位「ダシヨー」の称号を贈りました。一九九二年に亡くなった西岡氏の葬儀は、国葬として執り行われ、国を挙げて感謝の意が表されました。弔問はブータン全土から届き、その葬儀の壮大さは、過去に例がなかったといえます。ブータンに一身を捧げた西岡氏。日本人で彼の名を知る者は少ないですが、ブータンの人々は「ダシヨー・ニシオカ」として敬愛しています。

先の東日本大震災にあつては、震災翌日に国王主催の「供養祭」が挙行され、義援金一〇〇万ドルが、日本に贈られました。一人の日本人のおかげで親日国となりました。ブータンは小さな国とはいえ、日本にとっては、世界一大きな味方であります。